
クロス・ロード

kazuha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロス・ロード

【NNコード】

N6249C

【作者名】

kazuh a

【あらすじ】

部活帰り、俺たちはいつものように家に戻る。そして友人と別れ、いつもの交差点を渡ろうとする。だが、渡れない。そこにはいつもとは違う、違和感があった…

「じゃあな

それが俺たちの別れの言葉。いつも帰り道、いつもよつと帰るだけ。

今日の部活は疲れたな。

俺はチャリをこいで、並木道を通りて行った。風はそよぎ、互いに話し掛け合っているようであつた。

住宅街に入り、そしていつも通る交差点に出る。別にこの交差点を通らねば帰れないといつわけではないが、もう一つの道は橋を渡つて交差点の上を行くのだが、坂が急で昇るだけで疲れる道ので、部活疲れの帰りには体にこたえる。だからいつも下の道を通りている。

交差点の信号を待つていて。信号は一度赤になると、なかなか青には変わってくれない。しかし今日は何と早いものか。ものの十秒で変わった。

今日は何だかついているみたいだと、俺は気持ちよべ、ダルをこいだ。

そして横断歩道を渡ると、おばさんが困った様子でいた。片手に偽革らしいバッグと紙の袋を持っている。

「あの、すいません。この辺に、榎さんの家があるはずなんですが……」

それは道案内であつた。榎というのは、今さつき分かれた友人の苗字であつた。知つているが、面倒くさい。交番だって信号の対岸にある。そこに聞けばいいと思った。その上早く帰れる優越感で、もうすでに帰つた氣でいる。しかしその優越感が逆に俺の心を寛大させてくれるのであつた。少しの時間はいいだうと思つた。教えるぐりいなら。

「ああ、榎さんの家なら、この交差点を渡つて、そのまままっすぐ

行つて、三本目の道を左に曲がります。それから……

おばさんはさうに困惑したようだ。話が進むにつれて、顔が険しくなつていったのだ。

「すみませんが……連れて行つてくださいない？」

突然のことに困つた。早く帰りたかったが、この状況では抜け出せない。こうなることが事前から分かっていれば、分かりませんと言つて家に帰れば良かつたと思つ。道も分かる、時間もあるとなれば、今更時間がないので、知りませんなんて言えない。第一、俺のモラルに関わる。

俺には唯一つの選択肢しか残つていなかつた。

「……あ、はい。いいですよ」

なるべく明るく言おうとしたが、上手く言えたかが不安だ。声はややかすれていたが、自分の耳にはしかと聞こえていた。

「ありがとうございます」

おばさんは微笑んで、俺は自転車を降りて、二人はまた赤信号に変わつた信号を待つてた。

数分が過ぎた。待つてたる間、車の台数を数えていた。信号が変わると、俺たちは交差点を渡つて、俺の言つたとおり、また、今日帰り道として通つてきた道を逆走してた。そして数分で榊の家の前に来た。その間、一人は話すことはなかつた。唯一話したことはこれだけだ。相手から話しかけてきたのである。

「榊さんは、お知り合いなんですか」

「そうですけど……」

「友達ですか」

「はい」

これだけのことだつた。

「ここです」

「ありがとうございます。何とお礼を言えばよいかやう」

「いいですよ、別に。では」

なるべく快活に言おうと思つていたが、やはりそうするひとまで

きなかつた。一回田の神の家の前は特に変わつておらず、変わつているものとなれば、神と代わつておばさんが家の前に立つていてだけだつた。

自転車に乗り、その場をわざやかに立ち去つとした。

俺は気持ちを良くした反面、あー、時間の無駄をしたと心の奥の核の右側辺りで嘆いていた。そういながら、またあの交差点に舞い戻ろうとした。

しかしある道に目がついた。左へ行く道だ。そつちへ行けば、少々疲れるが、橋へ上がる。

もしかしたら、またさつきみたいなことがあるかもしれない。

俺はそんなことはもう嫌だと思いながら、左に曲がつた。開放感に包まれながら、橋を上つて行つた。これを越えれば家だと、早くも想像してしまつた。

そして俺は橋の頂上に来た。さつきまでいた交差点を見た。青だつた。普通に渡れたのだが、もうこれで終わりかと思うと、そんなことはどうでも良くなつてしまつた。

そこから後は下りだけだと、肩の荷が下りる思いでいたが、下部を見ると、なにやら工事をしているようであつた。

俺は唖然として、また登頂に引き返した。まだ信号は青かつた。それが妬ましかつた。

橋の下り坂を下り、もと来た道を戻つて、また交差点に戻つた。残念ながら、信号は赤に変わつていた。

今度はさつきと変わつて、そこで数分待つた。その時間が長く感じられる。今度は車のナンバーを足してみた。突然車どおりが多くなり、数えるのをやめた。すると歩行者信号が点滅していることこ気付いた。

俺はペダルをしつかりと足の裏に当て、すぐにでもこげる体勢を作つた。そして信号が青に変わるのと同時に、再びこぎ出した。

信号を待つてゐる時から気付いていたのだが、渡り終えたところに、幼稚園にまだ通つて間もないような子が泣いていた。そういう

ばこの辺りに小さな公園がある。きっとそこから抜け出して、ここに来たのだろう。しかしそれにしても、こんなところでは危ない。万が一交差点に出てしまつたら、大きな事故は避けられない。

俺はそれを見て見ぬ振りする」ともできなく、その小さな子に尋ねた。

「ねえ君。迷子?」

小せい子は一度泣くのを止めて、俺の顔を見た。そして安心してしまつたのか、また泣き始めた。

「どこから来たの?ママはどこ?」

小せい子はうつむきながら、しゃべり声で言つた。

「いなくなつたの…」

俺は当てが外れたことに残念に思つた。

公園であるなら、このまま家の帰路の途中にあるのでいいのだが、分からなことなると、再びこの交差点を渡らねばならない。交番はここからこの交差点の対角線上にあるのだ。

俺は残念に思いながら、一息ついて、その子に手を合せせるよう腰を低くして離しかけた。

「じゃあ、交番に行こうか

「…うん」

その小さな子は小さくうなずき、俺の服をつかんだ。そのほうが

好都合だつた。空いた手で自転車を押すためだ。

「しっかりつかんでついて来てね。ここ渡つちゃつたほうが早いか

「うら

そう言つて、まず、なかなか変わらない赤信号の横断歩道を渡るのではなく、青になつていいほつの道を渡つた。

渡り終えると、再びその子に話しかけた。

「君はどこで住んでいるの?」

「あつち

そう言つて、指を指した。その方向は明らかに交差点の向い側

ではないが、交番に行くにはしうがないだつたと思つた。

「君、えらいね。もう泣かないなんて。強いね」

「…うん」

少し元気付いたようだ。そして「くらか会話をすると、信号が青に変わつていてることに気付いた。

そして渡つて、交番に入つた。

「…すみません。この子、迷子なんです」

特に若くもなく、老けてもいなく、それ相応の中年の男性が座っていた。何か記していたようだが、きっと今日の出来事でもまとめていたのだろう。今日も平和だったと。

一旦手を止め、一枚の紙を机から取り出した。

「…どこで迷子になつたんですか」

警官は偉そうな口調で、かつ何で来るんだよと顔に書いてあつた。

そんな言い方で、こちらは客ではないが、不快感を持つた。

「すぐそこは交差点です。ちょっとこの交差点の対角線の場所です」

「そうですか…ありがとうございます」

ぶつきいぼうに話す警官に対し、日本の未来が不安になつた。それよりも、ここに預けるこの子のことが不安になつた。実際に、少しおびえた表情を作つていた。

「ここにいれば、すぐにママが来るから」

しかしその子はうつむいたまま首を振つた。

その不安を取り除こうと、俺はその子の頭をそつとなでた。

「君は強いんだから、大丈夫だよ。ちょっとの我慢だからね」

今度はうなずいてくれた。それは結構深かつた。強い意思を感じられた。こんなに小さいのにえらいなと思つた。

「えらい、えらい。それでこそ男の子だね」

俺はさらに頭をなでた。

男の子が泣かなくなつて、俺を見上げていた。俺が手を振ると、振り返してくれた。

「じゃあね」

そう言い残して、交番を後にした。

俺は外にとめていた自転車にまたがり、窓越しにまた交番の中を見た。警官に手を握られ、その場で不安そうな顔をしながら、顔だけがこっちを向いていた。

俺はペダルに足をかけたが、踏み出すことができなかつた。心が男の子の心を見透かして、踏み出すのをどがめている。

男の子は警官の手に引っ張られて、奥に連れられて行つた。

俺の足は自然にペダルをこいだ。心がきつく絞められて、心苦しかつた。

そしてまたこの交差点に来た。

まだあの男の子が心に残つており、息苦しい思いでその場で信号が変わるので待つていた。その気持ちをいち早く振り払いたくて、また車の数を数えだした。誰でも思いつきそつだが、さつきの数え方にを加えた。逆から来る車の数を引くのだ。はつきり言つてそんなことはどうでもいい。正直になると、あの男の子は母親に会えるだろうかと、母を訪ねて三千里のよつたシチュエーションを勝手に描いてしまつた。

歩行者用の信号が点滅し、車を数えるのを止め、横断歩道の先を見た。すると、何やら重いものを担ぐ老人がいた。それは人を求めているように見えた。脳裏によく見かけるマンガのコマがよみがえつた。

信号は青に変わり、俺は向こう側に急いで渡つて、その老人に話しかけた。

「あのー…重そうですね。代わりに持ちましょーか?」

そのご老人はゆっくりと自転車から降りた俺の顔を見た。

俺は一瞬ドキッとした。今思つと、ご老人に言つたことを後悔した。もしかしたら傷つけたかもしない。見た目より、実は若いかもれない。まだ自分のことを見つめているかもしない。

そんな自分を責めながら、老人の回答を待つていた。今頃取り消しなんて出来ない。待つことしか出来なかつた。

老人の口がついに開いた。俺はつばを飲み込んだ。

「じゃあ、お願ひします」

その言葉にホッと腕をなでおろす思いでいた。

「じゃ、それ、持ちます」

「はい、ありがとね」

荷物を受け取り、俺はそれを片手で受け取った。

「あら。力持ちなのですね」

照れ隠しをしながら、俺は唇を噛んで、小さくうなずいた。

そして、信号を待つ間、老人は話しかけてきた。

「高校生ですか？」

「はい、そうです」

これも暇つぶしが目的の、どうしようもない話なのだろうが、これは気遣いに感じられた。俺が気を使って荷物を運ぼうなんて言つたから、相手も気を使つているのだろう。しかしこの気の使い方は、俺が今までしてきたものとは違つた。気軽に話せるのだ。初対面の相手なのだが、なおかつ俺の五倍近くの歳が離れていそうなのだが、不思議な感覚だ。まるで祖母と話しているようだ。

「何をやっていらつしやるのですか」

「バトミントンです」

俺は答えるだけなのだが、老人はまるで孫と話をするように会話を楽しもうとする。なんて楽しいのだろうか。

信号は青に変わり、老人との話は歩き出しても止まらない。歩幅は老人に合わせようと努力している。曲がつてくる車は止まつっていた。話に夢中だった。いつの間にか渡り終えていた。

「どこまでですか」

「いえ、ここで大丈夫です。ありがとうね」

その言葉は、なぜか俺の心をむずむずさせた。

「いや、行き先まで送りますよ」

何言つてんだか。ここからどれくらい先のことだか分からぬのに、何でこんなことを言つたのか。しかし確証はあった。そんなに遠くはない。それは老人だからだ。こんな重い荷物を持って、ど

こに行くのだろうか。

「いえ、大丈夫ですよ」

「いや、すぐそこでしょ。最後までやらしてください」

「じゃ、お言葉に甘えようかね」

「どこの家ですか」

なるべく近いことを祈った。さすがにここから一時間も歩くような距離は嫌だ。せいぜい三十分が妥当だらう。

「すぐそこなので、また、お願いします」

「はい、分かりました」

俺たちはまた実らない話を弾ませながら、その家へ向かった。思つたより進むのが遅く、自転車で四十五秒、歩きでは三分ほどで行けそうな所を、わざわざ十分かけて、その家まで会話をしながら向かつた。

そして家の前まで着いた。

「ありがとうございます。今日は楽しかつたよ」

「いえ、構わないで下さい。大丈夫ですから。あ、運びますよ。玄

関前まで」

俺は老人の荷物を持つて、その玄関先まで運んだ。

「本当にありがとうございます。おかげで助かりました」

老人は繰り返し、頭を深々と下げた。

俺は自転車にまたがり、老人に軽い会釈をしてから風のように去つた。

またあの交差点に戻つてくると、寂しかつた。無性に寂しかつた。心に生えている枝先の葉っぱが風に根こそぎ持つていかれたようだつた。

心が完全にはげている状態で、何かを求めていた。また何かをしたいなどと。以前の自分にはなかつた、新しい自分を見つけたのではない。以前からあつたはずなのだが、俺はその自分を見ようともしていなかつた。目を伏せていたのだった。

嫌なことから目を背けたり、伏せたり、たつたそんなことで橋を

渡ろつとしていた以前の俺が恥ずかしくて、腹立しかつた。

信号が青になり、首をひねり、大きく一呼吸を置いてから、ペダルを踏んだ。

「…あれ？」

信号を渡り終えたところ、道に何か落ちているのに気付いた。落し物だ。どうやら男の子のものらしい。明らかに子供しか持たないようなものだ。

まあ、近いので送り届けてあげよう。

俺は点滅している青信号を急いで渡った。

「ケーンくーん。ケーンくーん」

女は大声で、その単語を繰り返して歩いていた。

俺はすぐにピンと気付いた。それはあの男の子の母親だらうとう推測だ。俺は違つてもいいと思い、その母親らしき人に言った。「すいません。さつき、男の子を交番に連れて行つたんですが…」

「…え、そうですか。ありがとうございます」

やや無愛想な感じで、女はぶっきらぼうに言つた。そして立ち去りうとした。

「すいません。あの、多分、これ、男の子が落としたものではないかと思うのですが、一緒に持つて行つてもらつてもいいでしょうか」
女の手にその落し物を渡すと、女はそれを凝視し、確かにこれはケン君だと言った。

「ありがとうございます」

若い女はそれだけを言い残して、さつさと行つてしまつた。

人は人でも、同種だが、一人一人がオリジナルだ。顔も違つし、体つきも違つし、髪の薄さも違つし、感性も違つ。境遇も違うなら、住んでいる環境も違う。生まれてくる時代や時間も違う。いい例として、若い女と先ほどの老人を比べると、明らかに礼儀が違う。それは一目瞭然だ。

俺はまた、青信号に変わることを待つていた。俺はいつもより、より一層疲れを感じていた。このまま眠りたいと思っていた。

何の車も通つていなかった。

「どうせなら渡つてしまおうとも思つていた。

「疲れたな……」

俺は少しばかり、甘えに負けていたのか、もしくは地面の坂に流れてしまつたのか、自転車の車輪は公道に出ようとしていた。すさまじい音が右耳に入つてくる。クラクションのような音だった。

その音に俺は目覚め、目の前に大型トラックが迫つてゐるのを見た。

気付いたときは遅かった。俺は何をやつてゐるのか。いまだに耳にはクラクションの音が響く。

しかし、クラクションの音の響きは、右から左に変わつていった。
「ちょっと、危ないじゃない。大丈夫だつた？」

それは聞き覚えのある声だつた。それもそのはず、その声の主は初めに道を教えた、あのおばさんだつたのだ。俺の荷台を引っ張つて、トラックに轢かれるのを助けてくれたようだつた。

俺は放心状態でいた。

「大丈夫？」

「……何か、疲れちゃつて」

「しつかりしなさいよ。若いんだから」

すると、その後ろから、老人も現れた。

「あらあ、まだいたの」

老人は俺に近づいて、その時の節はどうもと挨拶をした。

どうやら荷物を渡しに行つただけのことだつた。特に詳しい話もせずに、すぐに戻つてきつたらしい。俺との話で十分だつたのか。

「あ、お兄ちゃんだ」

迷子になつていた男の子は、若い女に連れられていた。

「ありがとね。これ、お兄ちゃんが見つけてくれたんでしょう？」

男の子の手には落し物が握られていた。

不思議だつた。ここに俺が助けた人たちがそろつた。こんなこと

があるのか。おばさんを道案内して、迷子を交番に連れて行き、老人の荷物を持ち、落し物を若い女に渡して迷子の場所を教えた。そして俺はおばさんにつけて助けられた。この周期的なものは何だろうか。

「あら、さつきより、いい顔になつたわね」
俺の顔から笑みがこぼれ落ちていた。
人はどうやって生きているのだろうか。
俺の心は温かくなつていた。

(後書き)

これは最近の人に対するメッセージです。
あなたはどんなことに気付けたでしょうか。
これから参考にしたいと思いますので、良かつたら感想をお願い
します。よりよい作品作りにご協力ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6249c/>

クロス・ロード

2010年10月8日15時05分発行